



結核症を再認識しよう！

▶▶ 結核は単一病原体による感染症としては世界最大 ◀◀

1、世界の現状

全世界では毎年800万人が結核を発病し200万人が死亡している。また、有病者は2,200万人に達する。

2、日本の現状

日本では毎年約4.3万人が新規結核を発病し約3,000人（1999年は2,935人）が死亡している。また、有病者は1999年より増加傾向にあり、約5.5万人に達している。

3、結核患者の年齢別特徴

厚生省保健医療局結核感染症課の調査によると、年齢別・新登録患者数において70歳以上は18,850人、また、この年齢階級の罹患率は132.4（対10万人比率）であり高齢者の結核が増加している。

4、大阪府の現状

大阪府における新規結核患者数は、毎年約6,000～6,500名（1999年は6,113名）である。1999年の結核死亡者2,935名中、大阪府における死亡者数は346名で全死亡者数の11.8%を占める。

5、集団感染と院内感染の発生頻度

近年、学校や医療機関での結核の集団感染（1995年：14、1996年：21、1997年：43、1998年：49、1999年：41件）や院内感染（1995年：3、1996年：9、1997年：7、1998年：11件）の報告が増加傾向にある。院内感染は、結核病床を有する病院のみならず、結核病床を有しない病院においても発生しており、本院でも十分に留意する必要がある。

4、臨床検査部の結核対策

1) 結核菌検査を充実！

1998年12月より遠心集菌法を行い、さらに1999年9月からは自動機器を用いた液体培養法を導入した。その結果、技術的に塗抹陽性率が上昇し、結核菌検出日数が短縮され、非定型抗酸菌の分離率が上がった。

2) 塗抹陽性患者/培養陽性患者の迅速診断を実施！

臨床上結核が濃厚に疑われ塗抹または培養検査で抗酸性菌が確認された場合は、PCR法またはイムノクロマト法で迅速同定を実施している。

これらの対応により結核症の迅速診断、早期治療開始及び結核症の早期防止対策が可能となった。

5、当院における結核院内感染対策は？

本年から新規採用スタッフ全員に2段階ツ反接種法によるベースライン値の確認と、ツ反陰性者に対するBCGを行っている。入院または外来患者で塗抹陽性の開放性結核患者が判明した場合、環境整備掛より保健所に連絡後、感染症対策部が中心となり接触者検診を実施している。過去5年間で接触者検診を行った回数は4回であるが、迅速検査の実施とINHの予防投与等により2次感染者は確認されていない。

<結語>

結核対策の基本は迅速な診断と適切な対策／治療である。今後、再興感染症として結核の重要性を個人個人が認識した上で、病院全体で確実な予防対策を推進していくことが必要である。

文責：臨床検査部 堀川 晶行、感染症対策部 浅利 誠志